

映画『ザ・ビートルズ GET BACK』 (デイズニープラス)



2021年に公開されたザ・ビートルズの3部作のドキュメンタリー映画。1969年1月、2年ぶりにアルバム、ライブを計画した彼らを密着撮影した22日間の貴重な映像を編集している。

演奏する彼らをテレビで観たことはあるが、この映画で二十代後半の素顔の彼らを見、改めて伝説ではなく本当に彼らはいたんだと感激した。スタジオで少年のようにふざけあいながらも、誰かが演奏し始めると次々音を重ねていき、曲が生まれ、名曲に仕上げていく様は感動的。艶のあるポールの声、シャウトするジョンの声、繊細なジョージの声、鼻にかかったリングゴの声、スタジオには彼女や子供達が訪れ、遊びながら曲作りを楽しむ姿や、様々な楽曲や演奏を聴けるのも嬉しい。途中、不満を抱えたジョージが脱退し、3人が説得に行く深刻なシーンも印象的だ。

そしてクライマックスはバンドとして最後になってしまったロンドンでの屋上コンサート。何度見ても心躍るドキュメンタリー作品である。

(浅野千里)

劉 慈欣著『三体』 (大森望、光吉さくら、ワン・チャイイ訳) (早川書房)



中国でベストセラーとなった作品の日本語版である。2019年7月に初版発行で、同年10月には早くも13版となっていることから人気の高さが伺えるのではないだろうか。ちなみに既に映画化もされているそうである。

内容は壮大なSFであり、出版社が早川書房であるのも納得である。冒頭は文化大革命時代のインテリ層への弾圧場面であり、物理学者の父が殺され自身も苦勞した葉文潔の若い時代が語られる。しかし、その後は一転、現在の中国の実在する機関や会社などが登場し、いよいよ、SFの本題へと突入である。さらには物語中に「三体」と呼ばれる仮想リアルゲームが登場し、時空の超越や文明の興亡が描かれるのも上手い仕掛けなのであろう。現実と仮想リアルゲームを織り交ぜることで、SFの嘘臭い部分はゲームなどに集約し、現実部分は多様な物理学理論で巧みに説明する。

中国とSFの組み合わせに興味があり、何より壮大なSFを読んでみたい方にはお勧めである。

(栗山貴臣)